

「今、明日の日本をデザインする」開かれる

アート、建築、デザインから行政まで—再構築に向けリレー形式で提案

大震災から5カ月と20日、その困難さも徐々に被災の復興と日本再構築の方向を模索する段階に入りつつある。森美術館では、近藤誠一・文化庁長官、アーティストの中村政人氏、アート・アンド・パブリック協会（AAPA）の清水敏男氏などアート、建築、デザインあるいは行政など、復興に携わる関係者11人・組が集まり、創造的な復興ビジョンや産業創生による今後の日本についてリレートーク形式で活発なセッションが行われ、様々な提案がなされた。

この「震災復興チャリティー・トークセッション」が開かれたのは、7月23日、港区六本木のアカデミーヒルズ49タワーホール。主催は森美術館、アカデミーヒルズ。

前・後半5時間余りとなるセッションだった。司会進行は、南條史生・森美術館館長。前半に6人・組のゲストが登場。まず、竹中平蔵・慶應義塾大学教授が「今は複合連鎖危機に直面している。高い志を持ち、大きな構想を持ちそれを世界に発信しよう」と呼びかけた。

次にデザイナー原研哉氏は「3・11は歴史的転換点。東北から未来のあり方を考えたい。それを如何にやっていくか、どう可視化するかが我々の仕事」とした。中島正弘・国土交通省国土政策局長は行政の立場から「日本全体が災害に強い国土に変えていきたい」と減災を提案。「Good」活動支援で知られるアーティスト・中村政人氏は「現地に行き、このリーダーな人を見つけたことから復興が始まる」とした。渡辺哲也氏は経済産業省クリエイティブ産業課長として『クールジャパン』を牽引した経験から「日本には各地に宝の山が沢山あることを知った。東北にも新たな産業の可能性がある」と力説した。

さらにAAPAの清水氏、村上タカシ氏、藤原純氏はそれぞれ「この大災害の後、アートは未来に何を伝えるのか。そこを探るべきだ」を提案した。後半、近藤・文化庁長官が登壇し、東北地域の文化財被災状況をデータで示し「今こそ文化芸術が必要とされる」と強調した。



鈴木寛・文部科学省副大臣（右端）と伊東豊雄氏ら（帰心の会）メンバーとのトークセッション

続いて、陸前高田、大船渡市に接し、今も支援基地である岩手県住田町の多田欣一・町長は「両市とは共同体として結ばれ、炊き出しから仮設住宅まで当初から活動を続けていた現状」を生々しくも明るく報告した。朝日新聞論説副主幹・坪井ゆづる氏は同紙上で募集した、幅広い年齢層の「ニッポン前へ委員会」の復興案並びに提言を披露。また、復興に向けて建築家は何ができるか、を考えるために結成された「帰心の会」のメンバー、伊藤豊雄・山本理顕・内藤廣・隈研吾・妹島和世の5氏が共に登壇、その後から鈴木寛・文部科学省副大臣が加わり合同セッションを展開、建築家・行政からの将来像展覧を語り合った。

最後に、南條館長はマルセル・デュシャン、ヨーゼフ・ボイスの思想、哲学をふり返りつつ、「今日はアート、デザイン、建築、行政から様々なビジョンが提言されました。日本には復興をきっかけに街づくりが行われてきた歴史がある。社会を作ることも立派なアートです。再構築を考える事がアートにつながっていく」と力強く総括した。

鈴木寛・文部科学省副大臣（右端）と伊東豊雄氏ら（帰心の会）メンバーとのトークセッション